

# 眞生

第九卷 第七號

□人は自分に都合よいと思ふとき幸福を感じ、自分の都合悪いと思ふとき不幸を感じるのが常であります。乍然、人間の實際は必ずしも不幸を感じる時が不幸でなく、又幸福と感ずるときのみが幸福でないことが多いのであります。

□否、それどころか、時によると幸福と思ふときに反つて不幸の根本を造り、自ら不幸と思ふとき反つて幸福の基を造るときがないとは限りません。

□従つて私共の生活には儼めこのことを承知して、常に此の憂いなきに深く注意することが何よりであります。而てそのとき私共の生活は初めて眞に一切の苦難を越えることができるのであります。

□世に眞人の生活とは正にかうした人類の生活を云ふのであります。言かへればいかなる事件に接しても、少しも心を動じない生活、それが私共の理想の生活であります。

□之に反して私共の生活に此の自覺のない時は所謂此の世の常として我他彼此の見解に捕はれて眞に安らぐの生活がないのであります。

□幸福を喜び不幸を悲しむと云ふことはもとより人として當然のことではあります。それが必ずしも眞の幸福でない場合、私共は更に一段の反省を要すべきものがあるかと思ふのであります。

□従て、私共は豫めかゝる事變に動せぬやう如來を中心として充分の修養が何よりであると思ふのであります。 (念)

# 家庭の宗教

二つの場合	念
家庭の宗教	念
現代の宗教思潮	土屋觀道
舍利弗の忍辱	十屋觀道
念佛の種々相	土屋觀道
吾朋便り	

## 二つの場合

「Kさん、あなたのことをAさんがあいつは何等の信仰もないよ、あれはたゞ口ばかりの奴だと申しましたよ」と之に對して、

「馬鹿な奴だ、自分に信仰がないのだから、反つて人のことをさう云ふのだよ、口ばかりと云ふのは自分のことだ、己に人の悪口を云はずにおれぬところが彼に信仰のない証據でないか」と。

### 二

「Tさん、あなたのことをBさんがあいつは何等の信仰もない、あれはたゞ口ばかりの奴だよと云いました」と之に對して、

「さうだらう、自分自身に對してさへ、あきたらぬ自分だもの、人からさう云はれるのも無理からぬよ。時によると之でも思はぬことで口にする私のことだ、人から口ばかりの奴と云はれるのも無理からぬ、人の一生と云ふものは靜に考ゆれば全く辱かしい事のみだ。それにしてもBなればこそ悪にもしてくれる、靜に思へば感謝の至りだ」がうした人もないとは限らぬ。(念)——一九三〇、七、三

- こゝに家庭の宗教と云ふ、その意味は家庭を無視せぬ宗教を云ふのであります。否、むしろ一家を中心として、妻子と共に如來を中心として、睦しく一家だんらんの喜びの生活を云ふのであります。
- 言かへれば單なる自分獨りの孤獨の宗教でなくして、妻あり子ある生活であり乍ら、それと共に俱に如來を中心として念佛して行く眞實の生活を云ふのであります。
- 尤もこの事については深き反省を要することでありましてたゞ徒に一家が睦しくして、仲がよいと云ふばかりでは、それは恰も豚の平和にすぎぬのであります。こゝではさう云ふ意味でないことはもとよりであります。
- 昔は佛教と云へば家を捨て、國を捨て、妻子を捨て、までも道を求むるのが本當であるとせられたものであります。従て、道の爲めには一切を打ち捨て、山に入り道を學ぶと云ふことが佛教の理想かの如く思はれたのであります。
- 乍然、それは道を求むるの態度であつて、それが必ずしも佛教の最後の理想ではなかつたのであります。否、それどころか眞實の佛教は如來の心を心として、一切の衆生と共に眞に生きるのが其の理想でありました。
- だから、佛教の出發点と佛教究極点とはそこに大なる相異があるのであります。
- 即ち道に徹すると云ふ点から云へば之を求むるに身命を屠しても其の道に精進すべく、捨家、棄慾、一切を放擲して道を求むるのがその理想であります。一度徹して、如來の大慈悲に目ざれば一切は如來を中心として如來の慈光の中に一家と共に、社會と共に眞に生くるのが道であります。

——一九三〇、七、三(念)——



# 現代の宗教思潮

土屋 觀 道

## 一、宗教としての佛教

□之は主として時代思想の變化によること、思いますが、近頃の人々は一つの佛教と云ふものに對しまして、それを單なる佛教として見る人は甚だ少いのであります。而て、それを一般には一つの宗教として之を見るの傾向があります。言かへれば凡そ宗教にはたくさん宗教がある。そして、佛教も亦その宗教の中の一つであること云ふ考へであります。

□此のことは一種の時代傾向でありまして、従來は佛教は宗教である、乍然多くの宗教は眞の宗教でなく、たゞ佛教のみが眞の宗教であるとの考へが主として、佛教徒内にあつたのであります。

□乍然今日の大勢はさうした考へは佛教徒の中にもなくなりました。そして一般の考へでは佛教も一種の宗教であり、その他の多くの宗教と共にやはり一つの宗教であるに變りはない。必ずしも佛教のみが眞の宗教であつて、其の他の宗教は眞の宗教でないこと云ふが如きは今日の人には到底考へられないこととなりました。

□従つて宗教には佛教の外にも基督教あり回教あり其他天理教、金光教等の幾多の宗教があるので

あつて、佛教ひとり眞の宗教であるかどうかは一かいに許さるべき事ではないとするのであります。□此の意味に於て、今日の佛教も今や従來のやうな考へを捨て、佛教も一種の宗教であると云ふ考へになりました。そしてまた現代の一般人が佛教も宗教の中の一つにすぎぬと考へるやうになつたことも事實であります。

□乍然私共の考へでは、單にそれが宗教の中の佛教と云ふだけでは満足ができないのであつてもどよりそれが宗教の中の佛教と云ふ事を否定するものではありませんが、宗教と云ふ宗教の中でも我が佛教こそは眞の宗教として其他の宗教よりも遠く勝るものであると見て見たいのが本心の要求であります。□之は主として、人間の向上心から起つて來る必然の要求でありまして、常に私共が最高至善の宗教を信じたいと云ふ向上の心が然らしむるものでありませう。

## 二、原始佛教より根本佛教へ

□原始佛教より根本佛教へ之も亦現代人の要求であります。今までの多くの佛教は主として小乗佛教より大乘佛教へそして大乘佛教の中にも各人各自の宗派佛教と云ふものが今迄の佛教でありました。□然に明治大正の佛教研究は主として、印度に於ける原始經典の研究となり、大乘小乗の問題よりも更にそれ以前の根本佛教の研究となつて來たのであります。ここに原始佛教と云ふのは主として釋尊を指すのであります。根本佛教とは釋尊自身に於ける宗教そのものを指すのであります。

□此の意味から云へば今日の大乗佛教や小乗佛教なるものは主として、是等の根本佛教並に原始佛教の發達したものであつて、それらの點がハッキリしなければ、眞の佛教が何であるか明瞭しないからであります。

□従つて、現代人は今や小乗佛教や大乘佛教と云ふものがいかなる點に於て眞の佛説であるかと云ふ點を知りたいと共に、更に進んで眞の佛教にふれやうとしてゐるのであります。

□之は主として、從來の佛教なるものが佛教と云ふ名のもとに佛教ならざる印度思想を混じてゐるが爲めてあつて、純粹の佛説即ち釋尊自身の佛教なり、釋尊自身の宗教を知らうとする要求から來たものであります。

### 三、今日の既成教團

□従つて、從來の既成宗教なるものは今や一大反省の時期に際會してゐるのであります。即ち從來の既成宗教なるものは大乘小乗にかゝらず、主として其の時代の影響を受けて發達したものが多いため、中には佛教以外の印度思想を多分に取り入れたものがあります。即ち佛教以外の他の宗教や哲學思想の加味せられたものが多く、反つて佛教の眞髓を鈍らせてゐるものも多いためであります。

□然しそれにしても、それが現代を生かし、若くは現代を指導し得るものであればよいのであります。が、時代思想の變遷は今や反つてその爲めに佛教の精神を鈍らせ社會の活動を妨ぐる傾きさへある今日、それらの一切を悉く打破して眞實の生命に一切を懸らせやうとする現代の要求はその解決を根本佛教、若くは原始佛教の中に發見しやうとしてゐるのであります。

□従つて、今日の既成佛教はよしそれが安全なる宗教であるにしても、それが原始佛教なり、根本佛教と相違する考へのもとに成立する思想や信仰であるならば悉く之を捨て、探らないと云ふ傾向さへ非常に強いのであります。

□そしてまた其の實、佛教の教へが今日の沈滞を來してゐる其の根本が主として、佛教の根本思想と相反するものが今日の佛教思想の中に多分に混入してゐることを發見した以上、從來の既成宗教がそ

れらの點に對して大なる反省と改造とを要するものある事も茲に大いに注意すべきであります。

□従つて、今日の既成教團は此の點に於て、今や根本佛教より更に見直したる改造の時期に接してゐるのであります。謂かへれば從來の既成教團は其の教團の中に原始佛教の根本精神を取り入れ、若くは其の精神を其の中に發見して宗門の更生を計らうとしてゐるのであります。

### 四、僧侶の専有より人類の宗教へ

□第四は僧侶の専有より人類の宗教へ向つて居ります。即ち現代は凡べてが獨占を許さぬ時代となり求め、自ら信じて各人が各々自分の信仰とし宗教として之を求め、之を語るの時代となつたのであります。

□たゞ道を説くものは僧侶にしても、之を信じ、之を行ふものは人類であると云ふ考へでありません。従つて今までのやうに、宗教は僧侶の司さざるもの、宗教家の専有の如く考へられた宗教は、今や人類の宗教として、各人のものとするの傾きとなつたのであります。

□乍然このことは實に何よりも當然なことでありまして、人類の文化の上之より結構なものはありません。而て本來宗教の本質は自己と神との關係でありまして、僧侶の關係すべきものではなかつたのであります。だから釋尊の佛教にも自覺覺他の道を教へるのみであつて、そこには絶對に信教の自由が許されてあつたのであります。

□然に人智の開げざる悲しさ、いつしか多くの人々は自らの宗教を放棄して、僧侶の専有に歸せしめたのであります。之は主として、人智の開けないからのことではあつたが、また所謂僧侶の横暴にもよつたのであります。

□此のことは少しく佛教の本質を研究すれば何よりも明かなことではありますが、此のことを最も明瞭に自覺して、それを多くの人々に説かれたのは實に釋尊その人であつたのであります。

□乍然今日の自覺は寧ろ佛教の自覺と云ふよりも、所謂人類一般の自覺からと云ふ方が本當の事實であります。従つて從來の佛教は今や反つて多くの民衆から此の自覺を促されてゐるの感があります。

□従つて、今日の所謂僧侶の宗教が本當の宗教ではない、眞の宗教は今少しく現代を生かす宗教でなくてはならない。而してそれは吾等の宗教であつて、僧侶の専有すべきものではないと云ふのが現代の宗教思潮であります。

### 五、自律的・社會的・普遍的・體驗的

□更に現代の宗教思潮は他律的より自律的となつて居ります。道德の上にも思想の上にも、たゞ古人がさう云つたからとか、昔からさう云つてあるからとか云ふことだけでは全く満足せなくなりまして、従つて宗教の上にも釋尊がさう云つたから、孔子がさう云つたからと云ふやうなものでは満足しなくなつたのであります。従つてそれはどこまでも自分自身の本心の満足にまで之を徹底せしむる自律的教でなくてはならぬのであります。

□そしてまた現代の要求は非常に個人的であると共に、社會的でなくてはならぬやうになりました。從來は口でこそ社會的なことを言ふにかゝらず、特に宗教信仰に於ては非社會的でありましたが、現代ではそれではいけなくなりました。そして、其の宗教はどこまでも社會的であり、また普遍的でありたいと云ふ考へが強いのであります。之は主として現代社會の一般が非常に社會と云ふものを重視するやうになつて來たからであります。

□そしてまた、現代は一切が科學的となり、實驗的となつて來た爲めに現代の宗教も、自ら科學的、

體驗的傾向を持つて來た感があります。即ちいかにそれを信するかと云ふことから、其の信する信の生活體驗がいかに科學的思想と矛盾しないかを考へてゐるのであります。

### 六、宗教より生活へ

□次には宗教より生活へ、即ち生活に即した宗教であります。此の意味に於て從來の宗教はともすれば人間の生活を離れて神の生活や佛の生活を空想した点がありました。従つて昔の宗教は現在の生活を離れて寧ろ他方土に死後の生活を夢想し、或は淨土とか極樂と云ふものを此の土以外の別世界に實在視する傾向が多かつたのであります。

□然に今日の社會はそれよりも、反て現在の只今をどうするかと云ふ事に重大なる観点を持って居ります。死後の生活よりも現在の生活をどうするかと云ふことに一切を没頭してゐます。従つて、人生の眞意義を現在生活の上に體驗せずには止まないのが現代の思潮であります。

□従つて現代人の要求は其の宗教に於ても死後の宗教や他方土の天國を今から求めるのではなくして、現在の生活に即して眞實の淨土を此の土に來らしめやうとしてゐるのであります。

□それは單なる生活を離れた觀照の生活でなく、又單なる實在の淨土ではなくして、日常の生活をしながら指導し、淨化するところの活動の源泉としての宗教を求めてゐるのであります。言かへれば高き理想を彼岸に置いて、現實に即してそれを一歩づつ實現して行くことのできる眞實の世界を求めてゐるのであります。

□従つて現代人は死後に淨土を求むるにはあまりに氣短かであります。言かへれば死んでから淨土に行く爲めなど、そんな氣長ではあり得ぬのが現代人の氣質であります。現代人は死後と云ふよりも現在に、少くとも現在を離れぬ永遠の生命に生きることを求めてゐます。だから今日を離れて別に死後

の宗教を求むるものではありません。

□従つて現代の要求は現在の生活を離れて一つの淨土を觀照する事のできない時代であります。云いかへれば自己の生活に無關係な單なる觀念の世界や概念の世界に遊ぶ事のできない時代であります。

□従つて、近頃の文學や其の他の藝術でさへ、今日の大勢は生活を離れてそれらを見やうとする傾きは全くあとを斷たうとしてゐます。まして自己の生命を托して永劫に生きやうとする眞實の宗教は今日の生活を離れて何の生命がありませう。

□今日の宗教は一切が生活を離れぬものとなりました。否それどころか、生活そのまゝが宗教の生活でなくてはならぬと云ふのであります。生活即宗教、宗教即生活があつて、生活の外に宗教を求め、宗教の外に生活を求むるが如きは全く時代遅れであります。

### 七、我等の宗教

□此の意味に於て、私共の宗教は少くとも以上の要求を充たすべく充分に現はれたものであります。宗教と云ふ宗教の中に其の宗教としての最高價値を現はしたものが私共の所謂宗教であります。

□従つて其の宗教はもとより釋尊の佛説たる根本佛教の中軸をなすものでありまして、原始佛教の本旨を離れないのみならず、更にその眞髓を一層に啓發して來たのが今日の宗教であります。

□従つて、それはまた僧侶の専有すべき宗教でなく所謂人類の宗教であります。否少くともそれは僧侶の専有より離れた人間の宗教であります。罪あるものも罪なきものも、老若男女貴賤貧富を論せずいかなる人をも悉く救はうとするの宗教であります。

□従つて、それはまた自律的、社會的、普邊的眞理の上に立てる體驗の宗教であることももとよりであります。(一九三〇、六、三〇—七、一)



### 舍利弗の忍辱

土屋觀道

昔舍利弗に或る外道が  
「御前の眼がきれいだから、それを  
とれないか」  
と求めた。

舍利弗は直に自分の眼球を掴み  
出してそれを其の外道に與えた。  
すると、外道はそれを自分の掌  
に受けとつて之を見たが、全く見  
られたものではなかつたので、  
「こんなものだつたのか」

と云つて、之を地に投げ捨て、し  
まつた。

そのとき舍利弗は之を見て別に  
怒つた模様もなかつた。

と、右は實際にあつたことなの  
か、それとも單なる一つの傳説に  
過ぎないものか、今日現在してあ  
る佛典の中に載せてある事柄であ  
ります。

### 二

普通の人から見れば全く想像も

つかぬ事柄であり、また普通の人  
としては到底、そんなことは爲し  
得ることではありますまい。

第一こはれるまゝに自分の眼を  
つかみ出して之を人に與へること  
です。第二には之を貰つた人がこ  
んなものかと云つてそれを地に投  
げ捨てたのに、それを見て何の腹  
も立てないことです。

之は一には佛者は人の求めに應  
じては何ものもこばまぬと云ふこ  
とです。第二には佛者は何事にも  
立腹せぬと云ふことです。

之をつつめて言へば佛者は何者  
に對しても其の求めをこばまず、  
又何事にも其の怒を發せぬと云ふ  
ことを舍利弗を通して、私共に其  
の實例を示されたものと云ふべき

せう。

三

乍然之は實に私共凡夫にとつては至つて困難のことではないでせうか。何等の理由もなく、たゞ乞はるゝまゝに自分の眼をつかんで之を其の人に與へ、而もそれをまた地に投げられて更に怒りを起さぬとはいかなる大悲も之に及ぶものはありません。いはゞ佛者忍辱の不行であります。

此の分ならば更に命を乞はるれば命を與へ、妻を乞うれば妻をも與へるのが佛者の不行であります。そこには何等の理由もありません、たゞ乞はるゝまゝに其の求めに應じ、そのことの善し惡しを

全く問ふてないのであります。

言かゆれば其の事の善惡を問はず、たゞ乞はるゝまゝに一切をその人に與へて寸毫も執するところがなく、又一切の事柄について寸毫の怒りも起さぬのが佛者の行事として説いてあります。

乍然こんなことがはたして私共一切の有情にできることでありませうか。私には全く不可解であります。

四

乍然それにもかゝらず、いやしくも此の釋尊の聖旨を傳ふると云ふ佛典の中に此のことが載せられてある以上、それが佛心に反する行事とも思はれません。而もそれ

が私共の心に反して、易々と舍利弗の上に行はれてゐると云ふことは全く驚くに堪えたことであります。

さてこゝまで考へて来て私共はふと思いつきました。それは此の舍利弗のことにことよせて、私共の眞實の平和を之によつて示されたものであると。それは人間の平和は主として、愛着と怒りだから破れて来るのだからいかなる場合に

もさうした心を私共に起さないやうにこのお示しであります。即ち舍利弗が乞はれるまゝに自分の眼球をつかみ出して之を其の人に與へたのは全く自己の身に

いて愛着をもたないと云ふことゝ、先方の求めをこばまないと云ふ從順の心でありませう。そしてまた、その眼球を捨てられても、あえて何等の腹も立てないと云ふことは全くそこに怒りと云ふものを發せないと云ふことを示してゐるのであります。

かうしたことは仲々に私共のできることでありませんが、凡そ物の争いと云ふものは主として、此の愛執と怒りから起るのであります。愛執の念があればこそ惜くもある、惜い心が即ち人に物を與ふる心にもなれないのです。そしてまた、怒りの心が敵を造くるの基いであります。怒はど平和を

害するものはありません。だから其の点を佛者は舍利弗にことよせて、私共に之を示したのではないでせうか。

此の意味に於て、これは必ずし

も事實あつたことでないとしても私共の心の底に愛着と怒りを持つなど云ふ佛陀の教へとして必ずしもそれが本當でないとは云へないのであります。(一九三〇、七、二)



念佛の種々相 (其の三)

土屋 觀道

一、念佛がいやになる

□「Iさん、近頃私は念佛がいやになる時がありますか」

○「あなたばかりではありません

い、私なども時々それがあつて困るのですか」

□「あなたのやうなお方にもやつ

ばりそれがあつたのですか、私はまたあなたのやうな方にはそんなことは無いものかと思つて居りました。それでもあなたはいつもよく念佛してゐられるではありませんか」

○「必ずしもさうとばかりも行きませんが、まあ念佛ばかりはつとめて止めぬ様にしてゐます」

□「そこになると私の如きは全く念佛を止めてしまひますが、然しいやなぎに念佛するは一層念佛がいやになるではありませぬか。或る人は念佛はそんなにつとめてまでやる必要はない、たゞ時々に来ることを出せたととき、たゞ申されるまゝに申

せばそれでよいと云ふ人がありますがごんなものでせう」

○「さう云はれるれば私にしたとて必ずしもいやなきまで強いて念佛せねばならぬと思ふときはかりでもありませんよ。やつぱり念佛するのがいやになつてそれを止めるときも、度々あります。またときによると如来様の大悲に思い至つて、我知らず口から念佛がほぼしるるときもな

□「それはまたどうしたわけですか、私には反つてそれがいややうであります」

か、私にはその意味が判りませぬ」

○「何も大した理由もないのですよ、たゞ日常の行儀とでも云ふのでせうか。それが凡夫の念佛だからとでも云ふのでせう。一見すればいやな念佛なんか申さんがい、又そんな念佛などしたとて、何の御利益もあるものかと云ふ者へもせんではありませぬが、それでもそのいやになつたところを今一度乗り越えて念佛精進するところに私には反つて大いな獲物があるやうに考へられる事があります」

□「私には反つてそれがいややうであります」

○「私にもそれが無いときもあり

ます。乍然それは多くの場合、いやな気分が念佛を止めるからでありませう。私の経験ではそれがいつでもと云ふのではない

ですが、いくら申してもいやな時がないでもありませんが、然しいやだからと云つて念佛を止めれば更にそれ以上に何か外のことまで心が落ちつかぬときがあります。そんなときに或る場合には念佛するのもしやでありませぬが、それを忍んで更に一層に念佛に精進するときに、私には

謂知れぬ念佛の味を知るべきがあるのではありません。此の意味に於て、念佛は必ずしも申した

いときばかりの念佛ではない、寧ろかうしたときにこそ念佛稱名が必要だなど、つくづく思はせられるときがありますよ」

□「して見ると私の念佛はまだ有難いときはかりの念佛ですね。そして今日のやうに私自身に念佛申すのがいやになつてゐるときに反つて其の念佛の必要があるやうですね。ごうも有難うございました。實は近頃あまり仕事之急がしいやら、それに御承知の通りの不景氣の爲めに心から念佛する暇もなく困つてゐ

たところでもあります」

つてそんな時にこそ充分に申すべきでないかと思ふのですよ。それにどうも念佛の申し方が足らぬと何となく心の落ちつきがとれなくて、本當の仕事も充分にできないのですからね。世には此の世が急しいから念佛が申されぬの、此の世が不景氣だから念佛申す暇がないのと申しませぬが、其の實は念佛さへ申さぬ位だから、本當の仕事ができぬのではないでせうかね。念佛のど



そこに眞實の世界の現はれて來るのではないでせうか。念佛が本當に充實せられて來るときは一切が喜びと望みと力との生活になるやうです。「艱難汝を玉にす」との古人の言葉もあるやうに、念佛の中に眞實の自己を發見して居るならば一切が力の生活となるのを覺ゆるものであります。然しかう云つたから、常に私がさうでばかりあると云ふのではありませんよ。たゞたゞ先徳の教へに従つていさゝか念佛の妙諦を味つたと云ふまでのことではありません」

爲めに日夜追はれて、本當に教へを聞く暇もなかつたやうであります。従つてこんなつまらぬことをお尋ねしてすみませんでした。之から私も一層念佛に精進したいと思ひます」

○「どうですか、今度の唐澤の御別時に御出なさつては。あまりに道友と離れることは要するに自分の爲めに不得のやうです。一週間と云へば急がしい身にとつては大へんな事でありまして、過ぎ去つたあとから考ゆれば、一週間や十日間は一月一年に比べては何でもありません。それも念佛が充實して眞に活動のできてゐる人にはその必要もない

のですが、こんな不景氣には全く御別時でもして身心の根本的立直してもやらなくてはやりきれませんですからね」

□「全く御言葉の通りですよ。では私も一つ何とか工面して、今度の唐澤には是非參加するやうにいたしませう。實際唐澤の御別時は思ひ出しただけでも私には昔のなつかしさが身にしみてまわります」

(一九三〇、七、三、念)  
この頃  
お念佛の聲もせなくなつた  
生垣の家  
黙つて  
冷飯を搥込んでゐる  
喧嘩のあまの  
夫婦

### 吾朋便り

○神戸 藤村亭子様より  
先日(は)久方ぶりに御元氣なる御尊顔を拜し、誠にうれしき事で御座いました。大阪、尼ヶ崎、神戸と斷片的の御講演でございましたが、心に鞭たれる事澤山ございまして、日々の行ひに大いに改善いたすべく其時は心得て居りますが、いつまでつきまますやら。矢張時々は御話しを承りたきものさつくく存じられました。殊更御尊き半日を私共にて御過し頂きまして藤村も思ひのほご日々申出で、はよろこんで深く感謝いたして居ります有難御禮申上ます。

○渡邊八右工門様より  
其後相變らず御無沙汰致しました。光明紙上の通信によれば益々御元氣で御活動大阪にて講演會がありまして、定ぬし同道友諸氏の御喜びの状察しられます。來月の唐澤山の御別時に付諏訪の同人及法光寺様より御快諾の御返事を頂

きまして安心致しました。今年こそはほんきで精進して見たいと思ひます。又別時に各地の同人に御目にかゝる事は實に心嬉しく今より指折つて待つて居ります之れに付きまして卒直に自己の意見を申上て見たいと思ひます。我々眞生同盟が幾歳月引續き斯かる貴き修養會をやつて居りますのに地元諏訪の士の一顧も與へんのは誠にあきたらんです。要するに斯かる集りのある事を多くは知らない爲めに共鳴者登山者も少いのではないでしよか、あへて私共は同志をふやすのは目的ではありませんが、歴史的地理的に恵れつゝある諏訪の士に之れを縁として眞生の普及こそは我々の義務であり責任であるかの様に感じます。此意味に於て本年最初の試みとして、廿三日夜廿四日夜二回位同町法光寺様でも御借りして一般の講演會を開催して見ては如何やと思ふのであります。然して共鳴者が引續き登山拜聴さす様にしたならば一舉兩得でないでしようか。一つ御考へ被下しまして、大阪の我同志會我尾藤初め皆様に御相談下さいまして御賛成願われましたならば

(大垣、佐屋同友とも御相談被下)今より其準備(ホスターの類)致しては如何と思ふのです。一昨夜私共例會にて皆様に申上ましたら原稼始め皆様も夫れは非常に良い事だと思ひを入れて居られました。然し此れのためには我等の修養に差支へをなす様の事では困りますから、其邊上人に於て良く御考へ願たいと存じます

私は諏訪の人士の顧みない事を常に遺憾に思つて居るのであります。これが私の右の問題を出しました出發點であります。尤も時日は廿二日夜及び廿三日の夜ならば尙更好都合と存じます。何卒宜敷大阪及神戸尼ヶ崎の同人に宜敷申上げ下さい。毎度亂筆であります御勘辨下さい。合敬。

○東京 土屋觀道  
今年もさやかうするうちに半年暮れました。過ぎ行く年月の速いこと實に驚くに堪えたりであります。各地の道友にも御變り在りませんか。幸に私共の一家にも目下無事一同慈光裡に精進いたして居りますから他事御安神下さい。

□次に今年唐澤の三味會も非常に盛會

のやうに思はれて嬉しくなりました。各地の道友も非常な勢いでそれを待つてゐて頂くやうであります。私も近年にない健康の身、今年こそは充分に覺悟いたして居りますから、各地の道友にもそのおつもりで集つて下さい。

□若しできることならば今日の社會相層に對してお互の所見も述べ、深く念佛にも徹して此の社會の苦難を充分に乗り切りたいものと思ふのであります。

□それにかうして各地からの道友が相集り、久々に相會して、心からなる道友の睦みに相したる云ふことは人生そのまゝの極樂云はればなりません。尤も遊ぶ爲めの念佛ではないことは云ふまでもないことでありますが、念佛の合間もいまにお互に人生を語り合ふと云ふことは決して他の處では得がたい事かと思ふのであります。

□世に急いだの、費用がかかる云ふ人もありますが、眞實に生きる人生の樂しみには必ずしもそれは問題ではありません。若し出来ることならば、思切つてかうしたところで身心の轉換を計

る必要があるかと思ふのです。□私も共俱にゆつくり語り合ひ度く何よりの樂しみさいたして居りますから、道友の集りの一人でも多からんことを念願して居ります。

□旅日記

□尚去月十二、十三の二日を私は京都の方に暮しました。之は京都の高等講習會を利用して知恩院の繼志學會が信仰講習會を開くと云ふのに招かれたからでありました。初めの一日は大したこともありませんでしたが、二日目の夕方からの集りには可成りの論議が強く戦はせられました。

□京都の集りは信仰の點に於て可成りに遅れてゐるでないかと思はれる點もありましたが、道友の心からなる其の集りには、私の深く感謝するところでありました。殊に最後の晩などは夜の十二時半までものこつて信仰を語り合ふ如き全く近來にない喜びの集りでありました。

□講習會の方にはたゞ一寸顔を出して見た丈けであり、何等の興味を引くことも私にはありませんでした。たゞ布教師大

會に於て得るところあらんことをつとめたのでありましたが、之とて全く述ぶるに足るものはありませんでした。

□乍然それよりも私の心をなして大いに満足せしめたものは道友恒村夏山先生を御訪ねしたことであります。氏と私とはかつてからの知人であるにか、わらず、信仰の一點に於て可成りに相違するものがあると思つて居りましたが、三四時間も相語る間に於て可成りに相通するもの、多かつたことは、之また一つの喜びでした。此分で行くならば遠からず更に相一致するもの、多きことを發見することでありませう。

□殊に十四日の早朝先生に案内されて、彼の専修院を訪問させて頂いたことは更に限らない喜びでありました。全く豫想以上の道場でありまして、そのまゝが先生御自身の信仰の表現かと思ふとさきその御心の尊さを衷心から合掌したのであります。醫業の側らよくかくまでもなされたものだが、感心の外ありませんでした。定めし辨樂上人にも衷心から御喜び下さることだらうと私にも嬉しく思へて

なりませんでした。

□更に前の奥様や御嬢様が御他界なつたことは凡夫の俗として謂知れぬ悲しみではありますけれども、今日の先生をして言はしむればそれがまた如來の宏大なる恩寵として御受けなされてゐる點もありません。それに今度お出でになつた新奥様にも前の奥様にもおさらせられぬ信仰の賢夫人であらせられることを拜しまじしたが、先生の爲めにも亦なきこと、喜ばれました。

□十四日岐阜、十五日大垣、十六日大阪十七日尾ヶ崎、十八日神戸、各地の集りに参加させて頂いたことは例の通りでありましたが、今度の集りは私の参加が久々のことである云ふので各地とも遠近の人々が集つて喜んで頂いたことは全く喜びの極みでありました。之も亦近頃にならぬ喜びです。

□十九日は神戸の藤村様の御案内で六甲の山に自働車を走せました。名古屋の渡部秀夫氏と佐屋の黒宮平八氏も御一緒でありました。海拔三千尺と云ふのにふもさから僅に二十分で其の頂に登ると云

ふことは全く驚きの外ありません。之また自然の風光に浴して近頃にならぬ喜びの一つでありました。

□十九日の晩は名古屋に着、渡部善兵衛氏の御宅に宿めて頂きました。二十日から三日間名古屋での三昧會でありました。二十二日の夜は岐阜の古賀様方での集りでした。出征軍人の遺族を中心としての集りでありましたが、全部五六十名の集りでしたらう。

□二十三日は夜は焼津の集り、晝は静岡に下車して粟生氏をお訪ねし、丁度蒲原旅からの御歸り早々の事であつたのでゆつくりその御話を承りました。二十四日は沼津に下車し、久々で辻様を訪れて其の夕には愈々學寮の人となつたのであります。

□學寮では光道を初め二人の子供と妻の喜びと私をしてすべての疲れを休ませてくれました。此のゆゆし間、ほんのそれは僅かのしゆん間ではあります。此の一家の喜びこそは恐らくは何ものにも代へ難き人生の妙樂でありませう。

□二十五日から二十九日までには殆ど毎日

のやうに宗務所に於ける淨土宗の佛教高等講習會に出席し、岩井智海僧正の五重傳法要義なるものを拜聴しました。そして午後は宗門信仰運動に關して三四の有志と共に働くことを得たのは何よりの満足でした。五日間に渡り淨土往生に關する思想信仰の協議會が其の力によつて聞かれたことは之また近來にならぬ一つの喜びでありました。

□その他二十五日の晩は傳道會館で淨土宗義の研究會が開かれ望月信亨博士の見佛に關する一研究の發表あるに参加し、また二十六日夜は神田の佐藤助治氏の道友座談會に加はり、七月一日は福岡工業學校時代の同窓會あり、二日は傳道會館で講演を試み四日は私の學寮で又道友の集りを催すことになつて居ります。

□之で一先づ眞生の原稿もできあがつたのでありますから、再び例の執筆にとりかゝることでありませう。幸に私の身心は共に健全近來にならぬ喜びさ方の中に居りますから乍他事御安神下さい。道友の各位にも乍序御安康のほどを御祈り申し上げます。

# 唐澤別時案内

時——七月二十三日より七日間  
處——信州唐澤阿彌陀寺

上諏訪驛下車、前日までに登山のこと。  
七月三十日朝、解 散。

本年こそは特に真剣に精進したいと思ひます。各地の道友もそのおつもりで御参加を願ひます。

## 誌代拂込者御芳名

○拾圓 高崎井上げん様 全 神戸關浦恒子様 ○貳圓 東京石山清吉様  
○壹圓宛 佐世保富田泰介様 東京荒川次郎様 柏崎種岡いさ様  
全猪浦博司様 ○六拾錢 愛知加藤明教様

ニクカ。

(大正十四年八月十三日) 昭和五年七月十日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 第九卷第七號  
(第三種郵便物認可) 昭和五年七月十二日發行 行

(大正十四年八月十三日) 昭和五年八月十五日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 第九卷第八號  
(第三種郵便物認可) 昭和五年八月二十日發行 行

本誌定價	
一冊	金十錢 郵税共
半年	金六十錢 全
一ケ年	金一圓全

●購讀希望者は代金を添へて御申込下さい  
●誌代は總て前金御拂込の事  
●送金は振替によるのが便利  
です

昭和五年七月十日印刷納本  
昭和五年七月十二日發行 行

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行兼 土屋 觀道

編輯人

名古屋市西區隅田町二一番地  
印刷人 百々治之助  
電話西(5)二九三番

名古屋市東區鍋屋町二丁目  
印刷所 藤山田活版印刷所  
電話東(4)三六五・三六六

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行所 眞生社

振替口座東京四七二八八番